

敬語使い分けの段階数

—札幌における敬語調査から(6)—

荻野綱男

要 旨

昭和53年7月に、柴田武教授を中心とする東大言語学研究室の有志は、札幌で敬語の社会言語学的調査を行なった。筆者は、この調査結果を利用して、「知っている」という内容を表現するのに、それぞれの話者がいくつのレベルで敬語の使い分けをしているかを計算した。これを「段階数」と呼ぶ。

「段階数」は話者の属性によってちがっている。しかしそれ以上に、得られた語形をどの程度まとめるかによって、段階数は相当ちがった数字になってくる。そこで語形の統合のしかたとして、分析者の直観からシッテル類、シッテマス類、シッテオリマス類、ゾンジテオリマス類の四つにまとめる「4類統合」、それに丁寧さの数量化の手法を応用した統合法などをとりあげ、実際に各種の統合をしたあとで段階数を求め、それらを相互に比較した。

その結果、「4類統合」では、職業による差、学歴による差などがはっきり出たが、丁寧さの数量化にもとづく統合を行なうと、そのような差が見えにくくなることがわかった。具体的な語形にもどって、両者の統合のしかたのちがいをつきつめていくと、「4類統合」では段階数が小さいとされた人にも、実は、終助詞の有無で示されるような敬語の使い分けがあることが明らかになった。

以上のような点をふまえて、現代の札幌での敬語の変化について、それが「段階数」の増減で表わされるようなものでなく、東京ないし共通語からのゾンジテオリマスなどの丁寧な語形の流入という形になっていることを指摘した。

1. はじめに

昭和53年7月に、柴田武教授を中心とする東京大学言語学研究の有志は、札幌で敬語に関する社会言語学的調査を行なった。この調査についてはすでに報告書⁽¹⁾が刊行されており、調査の概要については別の論文⁽²⁾にも短かくまとめてある。調査の特色の一つとして、全資料がコンピュータに入力され、筆者の開発した GLAPS というパッケージ・プログラムで処理・加工されたということがあげられる。そのため大量データであっても各種の整理・分析が簡単に行なえる状態にある。

本稿では、インフォーマント一人ひとりが各自の敬語体系として一つの表現内容を表現するのにいくつのレベルで語形を使い分けしているのかを調べていく。そして、そのような「段階数」に見られる個人差はどのようなものなのかを明らかにした上で、現在起こりつつある札幌の敬語の変化の方向を述べる。

(2) 敬語使い分けの段階数

2. 調査の概要

札幌の新興高級住宅地にある一戸建て住宅と高級マンションに住む503人に面接調査を行った。ここに取り上げるB項目「知っている」の設問は次のとおりであった。

「どこそこの電話番号を知っているか」とたずねられて、「知っている」と答えるとき、「知っている」というところをどのように言いますか。

1. 同じ年頃の親しい友人
2. あまり親しくない人で、少し年下の人
3. 親しい人で、少し年上の人
4. あまり親しくない人で、少し目上の人
5. ふだんことばづかいをいちばん気にしないで話ができる相手
6. ふだんいちばん丁寧なことばで話をする相手

これらの6場面の設定に関する議論は文献(2)にまとめてある。また、このB項目を分析の対象にした論文がすでにある⁽²⁾⁻⁽⁵⁾ので、参照していただきたい。

右のような調査であったため、ここでいう「敬語」は聞き手に対するものだけを意味している。また、「敬語」というより「待遇表現」と呼ぶほうがふさわしいかもしれない。

3. 段階数についての過去の研究

本稿で問題にしているような「段階数」については、すでにいくつかの研究があり、たとえば、国立国語研究所が行なった敬語調査で取り上げられている⁽⁶⁾⁻⁽⁸⁾。このデータにもとづいて、野元菊雄氏がさらに発展した研究を行なっている⁽⁹⁾。また三石泰子氏は、飯山市、新井市での言語地理学的の研究の中で、段階数を求め地図の形にしている⁽¹⁰⁾。

札幌での1年目の敬語調査の段階数の分析は、文献(11)の93ページ以降、および文献(12)(13)に報告がある。

これらの先行研究で明らかにされたように、段階数は、敬語の使い分けの体系の特徴の一部を表す指標と考えられる。そして、「都市化が進行するにつれて敬語が細かく使い分けられるようになり、段階数が多くなっていく」という仮説が設定できる。

4. 段階数を求めるむずかしさ

札幌では2で述べたような調査法をとったので、段階数は次のように定義できる。

それぞれのインフォーマントが六つの場面でいくつの語形を使い分けしているか。

ところが、このように定義は簡単であるが、実際に段階数を求めることは大変むずかしいのである。

段階数を求めるにあたっての第一の困難点は、どの語形とどの語形が「同じ」であるのか、あるいは「ちがう」のかの判別である。敬語を使い分けるということは、いくつかの「ちがう」語形を使うということであるから、同じ語形であるか別の語形であるかを判別することは本質的な問題なのである。ところが、この判別がむずかしい。

音声のレベルの微差は一応無視しよう。しかし、こうしても、ある女性のインフォーマ

ントの場面1の答え「シッテルワヨ」と場面2の答え「シッテルワネ」はちがうと考え、それをインフォーマントが「使い分けている」と考えていいのだろうか。あるインフォーマントは「シッテルヨ」と「シッテルサ」をはっきり使い分けていたが、別のインフォーマントは「どっちでもよい」といって使い分け意識はあいまいだった。こういうケースはどう扱えばいいのだろうか。調査時に「使い分け意識」についてインフォーマントを問いつめることは実際上不可能であり、今回の調査でもつっこんでたずねてはいない。

語形の類似が問題なのではない。場面5で「ワカッテルヨ」と答えたインフォーマントが場面1で「シッテルシッテル」と答えた例がある。これは本当に別物と考えていいのだろうか。

細かい差を無視するというのなら、ある程度答えをまとめることが必要になるが、どういう基準でどの程度まで答えをまとめるべきなのか。以前、筆者らは、B項目「知っている」で得られた107種の語形全体をシッテル類、シッテマス類、シッテオリマス類、ゾンジテオリマス類の四つの語類にまとめたことがあった⁽²⁾。しかし、そのまとめ方が正しいかどうか、疑問である⁽³⁾。

段階数を求めるにあたっての第二の困難点は、「併用」の処置である。今かりに場面が x, y, z の三つあり、そこであらわれる語形が a, b, c, \dots とあるとしよう。あるインフォーマントが場面 x で語形 a と b とを併用するとき、 $x=(a, b)$ と書くことにする。そして、たとえば、

$$x=(a), y=(b), z=(b)$$

と答えた人がいた場合、これを $\langle a, b, b \rangle$ と表記することにしよう。この人は2段階の使い分けをしていると考えてよい。では、

$$x=(a), y=(a, b), z=(c)$$

と答えた人は何段階の使い分けだろうか。場面 y で a を使うと考えれば $\langle a, a, c \rangle = 2$ 段階の使い分けと見られるが、場面 y で b を使うと考えれば $\langle a, b, c \rangle = 3$ 段階の使い分けになるのである。さらに、

$$x=(a), y=(a, b), z=(a, c)$$

の場合だと、 $\langle a, a, a \rangle = 1$, $\langle a, b, a \rangle = 2$, $\langle a, a, c \rangle = 2$, $\langle a, b, c \rangle = 3$ のように4通りの組み合わせが考えられる。

$$x=(a), y=(a, b), z=(b)$$

であるとか、

$$x=(a), y=(b, c), z=(d)$$

であれば、どう段階数を数えても一定である。しかしながら、場面が六つもあり、そのうちのいくつかに併用があるとすると、何通りもの数え方ができるようになってくる。これをどう解決すればいいだろうか。

段階数を求めるにあたっての第三の困難点は、「答えなし」の処置である。6場面について調査したとき、1場面だけ答えが欠けていたらどうしたらいいだろうか。大きく分けて3通りの方法が考えられる。

(1) 「答えなし」も一つの答えとみなす。

(4) 敬語使い分けの段階数

(2) 「答えなし」は省いて他の5場面で段階数を計算する。

(3) 6場面のうちの一つでも「答えなし」だったら、その人の段階数の計算をやめてしまう。

このうち(2)は、一人の「答えなし」を最大何個まで認めるかを考えておく必要がある。たとえば、「答えなし」が四つあると、段階数は最大2となるが、これでいいかという問題である。(3)は、多くのインフォーマントに「答えなし」が含まれていたりすると、せっかくのデータを捨てることと同じことになり、もったいない。(1)は、「そんな場合には何とも言わない」という積極的な意味での「答えなし」なら問題は少ないが、「忘れた」ようなときには、それを一つの答えとみなすことによってそれがことばの「使い分け」に関与しているとするのはためらわれる。

なお、調査者の意図とちがって、まったく見当はずれの答えが出てきたような場合も「答えなし」の処理と同様の問題になることに注意する必要がある。

5. 段階数のいろいろ

三つの困難点を乗り越えるためにはどうしたらいいだろうか。

まず、答えをまとめるかどうかは、全然まとめない場合と、何種類かのまとめ方をした場合と、それぞれに段階数を求め、それらを相互に比較してみることにする。

併用の問題については、答えの組み合わせをすべて試み、それぞれの組み合わせごとに段階数を計算する。そして、それらのうちの最大値と最小値についてとりあげる。

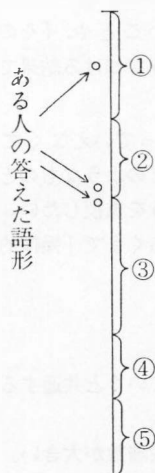
「答えなし」は今回は(3)の方法をとる。つまり、一つでも「答えなし」があったら、その一人については段階数を計算しない。これは、今回のデータでは「答えなし」が少なかったためである。

語形の統合について、もう少し考えてみよう。段階数を計算するときに答えをまとめておくということは、まとめられた答えの相互の間に使い分けがないと考えることであり、それは結局「同じ丁寧さ」であると仮定することである。一方、「知っている」の項目で得られた107種の語形の一つひとつにちがった丁寧さがあると考えられるのも当然のことである。では、これらをまとめるとしたら、どれとどれをまとめていくべきだろうか。

すぐ思いつくのは、シッテル類、シッテマス類、シッテオリマス類、ゾンジテオリマス類の4類統合である。が、この「4類統合」は分析者の主観によるものなので、データを分析するには望ましくないことがある。もっとインフォーマントの意識に近づいて語形を統合するべきである。そこで、筆者の考案した「丁寧さの数量化⁽³⁾」を応用してみよう。こうすれば、インフォーマントの答えだけにもとづいて、すべての出現語形107種の丁寧さの点数がつけられる。この点数の近いものどうしをまとめていけばいい。丁寧さの点数は、出現頻度が6場面通算で二個以上ある68語形については文献(4)に示してあるので参照していただきたい。

107語形に与えられた丁寧さの点数を用いて、クラスター分析の手法で語形をまとめていくと、図1のようになる。図1は16類に統合したあとのようすを示しているが、このような樹状図を見ると、語形の統合はどこで区切りをつけたらよいか一概にはいえないこと

図1 諸語形を丁寧さの数値によってまとめていくようす

図2 丁寧さの数
量化による語形
の統合のモデル

丁寧さの数直線

がわかる。そこで、文献(1)では、16類の統合、11類の統合、5類の統合の三つをとりあげ、それぞれの統合法によって段階数を求め、比較している。この統合法は、結局、図2の右側のような丁寧さの数直線上に各語形を位置づけ、ここからここまではカテゴリー①、ここからここまではカテゴリー②というように統合したことに等しい。したがって、この方法では、本来丁寧さにあまり差がない語形が、運命のいたずらで別のカテゴリーに含まれてしまうこともある。図1の例では、たとえばシッテイマスヨとシッテオリマスヨがそれぞれである。こうなると、ある人の答えが、図2の左側の白丸で示されるような場合、3段階と見なされるがそれでいいのだろうか。

そもそも「ことばの使い分け」は個人ごとにちがっているのである。したがって、ある語形統合法を決めてそれを全インフォーマントに適用すること自体おかしいといえおかしいのである。ではどうしたらいいのだろうか。インフォーマント一人ひとりに対してそれに適した語形の統合を行なえばいい。

厳密に言えば、人によって語形の丁寧さは異なるといえる。しかし、今は個人ごとに話

(6) 敬語使い分けの段階数

形の丁寧さを求めることができないので無視し、語形の丁寧さは全インフォーマントに共通であると仮定する。つまり、丁寧さの数量化によって107語形に与えられた(1から107までの)点数は、全員共通にあてはまるとみなすのである。すると、あるインフォーマントは丁寧さが59, 63, 93の3種の語形を用いているとか、別の人は21, 37, 77, 99の4種を用いているとかのあらわしができる。そこで、丁寧さのちがいがある程度以内におさまるならば、それらを「使い分けがない」とみなして統合するのである。こうして個人ごとに統合のしかたをかえて語形をまとめたあとは、他と同じく併用を考慮しつつ段階数を計算すればよい。

丁寧さの数値の差がどれくらいまでのものを統合すべきだろうか。ここでは、仮に、5, 10, 20の3種類を試してみる。この差がどれくらいのものかは、全語形が1から107までのあいだの丁寧さの点数を与えられているという事実、および各場面で使われている語形の丁寧さの平均を算出すると表1のようになるという事実から推測していただきたい。

表1 場面ごとの語形の丁寧さの平均

場面	語形の丁寧さの平均
5	24.94
1	34.37
2	56.06
3	69.33
4	83.61
6	87.00

語形のまとめ方として「そのまま」、「4類統合」、それに丁寧さの数量化にもとづく「5差統合」、「10差統合」、「20差統合」の5種類を考えてみよう。併用の処理について、最大値をとるやり方と最小値をとるやり方があるので、それを組み合わせると10種類の段階数が求められることになる。これらの10種類の段階数を、503人

全員について求め、全体平均と各属性別平均を算出したのが表2である。段階数の欄の「大」と「小」は、併用処理の「最大値選択」と「最小値選択」の意である。

全体平均を見ると、すべて「大」のほうが「小」より段階数が大きいことや、「そのまま」-「5差」-「10差」-「20差」の順に段階数が小さくなっていくのはうなづける結果である。

表2をざっとながめれば、「敬語の使い分けはほぼ3段階程度」といっていえなくてもないが、非常にあいまいな結果である。それよりもむしろ、段階数をどのようなものとしてとらえるかによって結果が大幅にちがってくるのだということのほうを重視したい。段階数を求めるにはこうすればよいという決定版があるわけではなく、あくまで「操作的」に計算されるものなのである。

6. 属性による段階数の差

10種類もの段階数が計算されても、なお、それらを属性別平均で見えていくと共通する点が多い。

1. 住まい別では、一戸建て居住者よりもマンション居住者のほうが段階数が大きい。
2. 性別では、男性よりも女性のほうが段階数が大きい。
3. 出生地別では、関東とその他(中部地方以西)の段階数が大きい、北海道(札幌を除く)の段階数が小さい。札幌は両者の中間である。

表 2 インフォーマントの属性と各種の段階数の平均

属性	段階数	そのま	そのま	五差	五差	十差	十差	二十差	二十差	四類	四類
		ま大	ま小	統合大	統合小	統合大	統合小	統合大	統合小	統合大	統合小
全体		3.60	3.38	3.12	2.94	2.82	2.72	2.17	2.15	2.67	2.59
住まい	一戸建て	3.52	3.32	3.06	2.91	2.79	2.70	2.18	2.16	2.63	2.55
	マンション	3.67	3.43	3.18	2.97	2.86	2.74	2.16	2.14	2.71	2.63
性別	男	3.55	3.28	3.11	2.88	2.82	2.67	2.20	2.16	2.52	2.42
	女	3.63	3.44	3.13	2.99	2.82	2.75	2.15	2.14	2.77	2.70
出生地	札幌	3.60	3.45	3.12	2.99	2.83	2.77	2.18	2.18	2.66	2.64
	北海道	3.41	3.19	2.92	2.75	2.72	2.58	2.15	2.12	2.51	2.44
	関東	3.48	3.17	3.13	2.96	2.74	2.65	2.13	2.09	2.76	2.62
	その他	3.72	3.46	3.35	3.15	2.96	2.85	2.20	2.18	2.91	2.76
年齢	22～32歳	3.66	3.42	3.04	2.83	2.77	2.67	2.17	2.16	2.59	2.53
	33～37歳	3.56	3.31	3.04	2.86	2.81	2.71	2.12	2.12	2.68	2.60
	38～44歳	3.53	3.33	3.05	2.89	2.77	2.66	2.12	2.10	2.57	2.53
	45～52歳	3.65	3.39	3.19	3.01	2.86	2.74	2.25	2.21	2.73	2.64
	53～81歳	3.58	3.40	3.25	3.09	2.89	2.79	2.19	2.15	2.75	2.63
学歴	大学卒	3.65	3.41	3.17	2.96	2.88	2.74	2.19	2.16	2.74	2.64
	短大卒	3.95	3.69	3.19	3.00	2.90	2.79	2.29	2.29	2.81	2.73
	高校卒	3.61	3.39	3.15	2.99	2.85	2.77	2.18	2.17	2.71	2.64
職業	専門学校	3.17	3.00	2.85	2.67	2.57	2.47	2.02	1.97	2.24	2.20
	専門・技術	3.36	3.17	2.93	2.69	2.71	2.57	2.21	2.19	2.51	2.44
	管理業務	3.97	3.60	3.41	3.15	2.94	2.77	2.26	2.23	2.77	2.63
	事務	3.41	3.30	2.95	2.86	2.73	2.68	2.22	2.19	2.56	2.50
	販売	3.63	3.37	3.18	2.96	2.88	2.71	2.18	2.16	2.52	2.50
	技能・生産	2.86	2.57	2.57	2.36	2.36	2.36	2.00	2.00	2.23	2.08
	サービス	3.50	3.42	2.92	2.75	2.67	2.58	2.00	2.00	2.00	2.00
転入年	その他	3.13	2.88	2.75	2.63	2.75	2.63	2.38	2.25	2.38	2.38
	主婦・無職	3.62	3.42	3.14	2.98	2.84	2.76	2.14	2.13	2.76	2.68
	昭26～38年	3.20	3.04	2.89	2.74	2.59	2.52	2.15	2.13	2.59	2.51
	昭39～45年	3.61	3.51	3.20	3.12	2.86	2.80	2.14	2.14	2.64	2.59
	昭46～48年	3.64	3.36	3.10	2.92	2.84	2.72	2.14	2.10	2.75	2.55
	昭49～50年	3.66	3.45	3.14	3.01	2.87	2.80	2.18	2.17	2.72	2.69
	昭51～53年	3.64	3.38	3.15	2.92	2.84	2.70	2.18	2.15	2.65	2.57
札幌在住	1～2年	3.59	3.41	3.12	2.93	2.78	2.68	2.11	2.07	2.64	2.57
	3～8年	3.57	3.22	3.13	2.88	2.87	2.72	2.12	2.10	2.74	2.58
	9～19年	3.74	3.50	3.18	2.99	2.85	2.72	2.22	2.21	2.67	2.62
	20～32年	3.64	3.41	3.08	2.92	2.80	2.70	2.17	2.14	2.61	2.53
	33～70年	3.41	3.30	3.05	2.94	2.76	2.71	2.21	2.20	2.70	2.65
印象A	非常に丁寧	3.90	3.70	3.36	3.22	2.96	2.90	2.14	2.08	2.94	2.85
	やや丁寧	3.77	3.47	3.32	3.10	2.98	2.85	2.25	2.24	2.95	2.82
	普通	3.48	3.28	3.01	2.85	2.76	2.65	2.17	2.15	2.57	2.51
	ぞんざい	3.35	3.16	2.79	2.65	2.56	2.49	2.05	2.03	2.12	2.10
印象B	ほぼ標準語	3.68	3.43	3.20	3.00	2.89	2.78	2.20	2.18	2.76	2.67
	やや方言	3.26	3.09	2.78	2.68	2.58	2.50	2.07	2.05	2.37	2.34
	かなり方言	3.65	3.53	3.12	3.00	2.59	2.59	2.18	2.18	2.25	2.19

(8) 敬語使い分けの段階数

4. 年齢別では、だいたい年齢が高くなるほど段階数が大きくなる。
5. 学歴別では、短大卒が最も段階数が大きい、これは性別差の影響だろう。短大卒を除いて考えれば、学歴が高いほど段階数が大きい。
6. 職業別では、管理と主婦・無職が段階数が大きい。技能工・生産工程従事者（ただし14人だけ）が段階数が小さい。
7. 転入年別では、昭和26～38年の人の段階数が小さい。他の四つの層は同じようなものであり、一定の傾向は見られない。
8. 札幌在住年数は、一定の傾向は見られない。
9. 調査者の印象A（インフォーマントのことばづかいは丁寧だったか）では、丁寧だと判定された人ほど段階数が大きい。
10. 同じく調査者の印象B（インフォーマントのことばづかいは標準語のか方言のか）では、「ほぼ標準語」が最も段階数が大きく、次が「かなり方言」で、最後が「やや方言」である。ただし、4類統合では、「ほぼ標準語」—「やや方言」—「かなり方言」の順になる。

ただし、以上のような属性差は、「20差統合」でははっきりせず、しばしばそうならないことがある。それに、20差統合の段階数はかなりおおまかな分類である4類統合よりも、ずっと段階数の平均が小さいので、この「20差統合」は「過度の統合」になってしまい、実態をうまく反映していないようである。

20差統合以外では、前述の属性差が共通して見られるので、段階数をどのようにとらえようとも、属性差は一応抽出できるということがわかった。では、段階数の多少に強くかかっているのはどの属性なのだろうか。また、そのような属性による差をはっきり示す段階数はどれなのだろうか。次にこれを調べてみたい。

インフォーマントの属性による段階数の差を、ここでは仮に「変動」と呼ぶことにし、次の式で計算する。

$$\frac{(\text{各属性ごとの平均段階数の最大と最小の差の絶対値})}{(\text{全インフォーマントの段階数の平均})} \times 100$$

たとえば「そのまま大」の段階数の学歴による変動を計算してみよう。表2から、最大は短大卒の3.95であり、最小は中学卒の3.17であり、全体の平均が3.60であることがわかるので、変動は、

$$(3.95 - 3.17) \div 3.60 \times 100 = 21.67$$

となる。大まかにいえば、変動というのは、「属性によるちがいが何%あるか」ということである。この計算の結果をまとめたのが表3である。

印象Aと印象Bを除いて考えると、段階数の多少に最も関係が深い属性は職業であり、次が学歴、出生地、転入年となる。しかしながら、これら四つの属性は相互に強い関連があることが確かめられており、何が最も重要な因子であるかを適確に決めることはむずかしい。

では、これら四つの属性で大きな変動を示す段階数はどれだろうか。表3を横方向にみ

表3 インフォーマントの属性と各種の段階数の変動

属性	段階数		五差統合		十差統合		二十差統合		四類統合	
	大	小	大	小	大	小	大	小	大	小
住まい	4.17	3.25	3.85	2.04	2.48	1.47	0.92	0.93	3.00	3.09
性別	2.22	4.73	0.64	3.74	0.00	2.94	2.30	0.93	9.36	10.81
出生地	14.17	14.50	13.78	13.61	8.51	9.93	3.23	4.19	14.98	12.35
年齢	3.61	3.25	6.73	8.84	4.26	4.78	5.99	5.12	6.74	4.25
学歴	21.67	20.41	10.90	11.22	11.70	11.76	12.44	14.88	21.35	20.46
職業	30.83	30.47	26.92	26.87	20.57	15.07	17.51	11.63	28.84	26.25
転入年	12.78	13.91	9.94	12.93	9.93	10.29	1.38	3.26	5.99	6.56
札幌在住	9.17	8.28	2.56	3.74	3.90	1.47	5.07	6.51	4.87	4.63
印象A	15.27	15.98	18.27	19.39	14.89	15.07	9.22	9.77	30.71	28.96
印象B	11.67	13.02	13.46	10.88	10.99	10.29	5.99	6.05	19.10	18.53

ると、そのまま——4類統合——5差統合——10差統合——20差統合の順に変動が小さくなっていく。つまり、「そのまま」や「4類統合」の段階数では属性による差ははっきり出る一方、丁寧さの数量化による段階数ではそれほどはっきりとは差が出ないということである。併用処理方式「大」と「小」の差はあまりない。この理由は、事実上併用のケースがさほど多くなく、結果に大きな影響を及ぼすほどではなかったということだろう。

7. 4類統合と10差統合のちがい

「そのまま」は段階数の平均も大きく、他の段階数とは少々性格を異にする。では段階数の平均がかなり近い4類統合と10差統合では、どんなちがいがあるのだろうか。

併用処理方式「小」で計算したときのこれら2種の段階数の関係を表4に示した。4類

表4 四類統合と10差統合の段階数のちがい(小)

四類統合	10差統合						計
	算出不能	1段階	2段階	3段階	4段階	5段階	
算出不能	23	1	14	18	5	0	61
1段階	0	7	4	0	0	0	11
2段階	0	1	142	54	2	0	199
3段階	0	0	11	145	36	0	192
4段階	0	0	0	30	9	1	40
計	23	9	171	247	52	1	503

統合が「算出不能」で10差統合で段階数が計算されているものがあるが、これは、4類統合ではおさまりきれない「その他」の影響である。4類統合では「その他」の語形は「答えなし」と同様に扱ったのである。

表4を見ると、4類統合と10差統合で段階数が一致しないものがかかなり多くある。それらの不一致が、表2や表3に見られる両者の差となっているわけである。そこで、表4の不一致のケースについて、その実態を追求してみよう。

(10) 敬語使い分けの段階数

表 5 個人番号906011のインフォーマントの答え

場面	語形	四類統合コード	丁寧さ
5	シッテルゾ	1	10.36
1	シッテルヨ	1	21.37
2	シッテル	1	20.76
3	シッテイマスヨ	2	62.65
4	シッテイマスヨ	2	62.65
6	シッテマス	2	76.87
段階数		2	4(10差統合)

表 6 個人番号107051のインフォーマントの答え

場面	語形	四類統合コード	丁寧さ
5	シッテルヨ	1	21.37
1	シッテルヨ	1	21.37
2	シッテマスヨ	2	58.77
3	シッテマス	2	76.87
4	シッテマス	2	76.87
6	シッテオリマス	3	91.33
段階数		3	4(10差統合)

表 7 個人番号109072のインフォーマントの答え

場面	語形	四類統合コード	丁寧さ
5	シッテルヨ	1	21.37
1	シッテルヨ	1	21.37
2	シッテマスヨ	2	58.77
3	シッテオリマス	3	91.33
4	ゾンジテオリマス	4	99.21
6	ゾンジアゲテオリマス	4	103.08
段階数		4	3(10差統合)

がある。

反対に、4類統合の段階数のほうが10差統合の段階数よりも大きい例として、表7を見てみよう。4類統合では別のカテゴリーになるシッテオリマスとゾンジテオリマスが、丁寧さの数値では差が10以内になっている。このため10差統合では三段階と認定されてしまうのである。他の例を見ても、4類統合のほうが10差統合よりも段階数が大きいものは、ほとんどすべて、このシッテオリマスとゾンジテオリマスが関係している。

まず、両者の段階数の差が大きいものを調べてみる。表5は4類統合で2段階、10差統合で4段階となった例である。丁寧さの数値の結果によればシッテルゾはシッテルヨやシッテルよりもずっとぞんざいな語形であり、シッテイマスヨはシッテマスよりも丁寧さが下がるのである。その差が10以上あったので、10差統合では4段階となるわけである。

10差統合のほうが4類統合よりも段階数が大きいものは、調べていくとそのほとんどが終助詞の有無に関係している。類例として表6を見よう。この例ではシッテマスヨ（丁寧さ58.77）とシッテマス（丁寧さ76.87）の差が10以上あるため、10差統合の段階数のほうが4類統合の段階数より一つ大きくなっている。このような差の原因になる語形として、シッテマスヨ（58.77）とシッテマスケド（79.39）、シッテマスヨ（62.65）とシッテイマス（79.52）などのペア

以上の検討により、4類統合の性格がはっきりしてきた。丁寧さの数量化にもとづく段階数（10差統合）は、データからおのずと決まってくる段階数であって、インフォーマントのもつ体系を反映する傾向が強い。一方、4類統合は、実際には丁寧さの差の大きい終助詞の有無を無視し、差の小さいシッテオリマスとゾンジテオリマスを区別するものである。4類統合は分析者の直観による統合である。分析者は共通語の体系をもち、敬語の知識も（インフォーマントの平均レベルよりは）多いと考えられる。そのような分析者の目からは、動詞の語幹が交替するような大きなちがいをもちシッテオリマスとゾンジテオリマスを同一視することはできなかつたし、また、丁寧な語形について知識があるため、かえって普通のデスマス体の語形における終助詞の有無による大きな差に気づかなかつたのである。

したがって、4類統合の段階数が大きい人は、敬語の知識の多い人、標準語的なことばづかいをする人と考えられる。ふりかえって、表2と表3を見てみよう。4類統合の段階数が、丁寧さの数量化による段階数よりもはっきりと「学歴による差」（中学卒と高校卒以上）や「職業による差」（サービス業と管理職）を示しているのは偶然ではない。表2で調査者の印象Bのところを見ると、他の段階数と異なり4類統合だけが、「ほぼ標準語」—「やや方言」—「かなり方言」の順に段階数が小さくなっている。表3で調査者の印象Aを見ると、4類統合だけがかなり変動が大きい。調査者の主体は東大言語学研究室の学生であり、調査者も共通語の知識が多かつたと考えられるが、そういう調査者の耳で判定したので、このような結果になつたものと考えられる。

8. まとめ

段階数は、概念としてははっきりしているのだが、実際にそれを計算するのはむずかしい。ここから、各種の段階数というものが想定され、それらを相互に比較する中から、それぞれの段階数の性格を明らかにしてきた。

語形を統合せずに計算する「そのまま」の段階数は、細かい差も大きい差も同じに見てしまい、段階数を見る上では必ずしもよい方法ではない。また、「4類統合」で計算する段階数は、分析者の視点がどうしても入ってきてしまい、その段階数が大きい人は、敬語知識のある人と重なってしまう。これらに比べれば、丁寧さの数量化にもとづく段階数は、インフォーマントの意識する敬語の使い分けに一步近づいているといつてよい。この方法によると、4類統合の段階数の分析では敬語の使い分けが少ないと見られる人が、実はその人なりの基準で使い分けをしているようすが見えてくるのである。

では、段階数の分析の出発点となつた「都市化が進行するにつれて敬語が細かく使い分けられるようになり、段階数が多くなっていく」という仮説は、検証されたと見るべきだろうか。それとも否定されたと結論するべきだろうか。

都市化というものの定義はむずかしいが、ここでは一応一戸建てよりもマンションを都市化の程度が進んでいると考えよう。今回の調査資料から見ると、マンションには若い人が多く住んでいる。そのような属性による差を調べると、4類統合の段階数ではかなりはっきりとした差が出てくるが、丁寧さの数量化による段階数では、一応それに並行した差

(12) 敬語使い分けの段階数

は見られるものの、それほどはっきりとはしていなかった。これは結局インフォーマント一人ひとりがそれぞれの立場で使い分けをしているためだと考えられる。結論としては、都市化にともなって「敬語が細かく使い分けられるようになる」というより、「共通語ないし東京語に存在していた丁寧な語形が使われるようになり、そのような語形と以前からある語形とで使い分けがなされるようになった」ということである。具体的な語形に即して、かつ単純化していえば、以前の札幌の敬語はゾンジテオリマスのような語形がなく、シッテマスヨとシッテマスのような終助詞のちがいがいしかないう語形を用いて使い分けをしていた。その後、しだいに語形のまったく異なるゾンジテオリマスのようなものが使われるようになり、それが敬語の使い分けに大きく関与してきて、終助詞の機能が二次的になったということである。

この記述は大まかな傾向であって、現実はいくらほどきれいではない。今では札幌人の中にも新しい丁寧な語形を使う人が多い。特に若い人や高学歴の人は東京人とそれほどちがっているとは思えない。しかし、札幌での敬語の変化を右のように考えるなら、「札幌(北海道)では敬語が未発達だ」とか「札幌(北海道)の人はことばが乱暴だ」とかいわれてきたことも説明できる。札幌の人がその人なりの敬語の使い分けをもっている、東京の人から(4類統合のような目で見ると、丁寧な場面でもさほど丁寧なことばを使わないように見えたのである。

札幌の敬語の変化は、「段階数」で計れるようなものではなく、もっと質的なものである。それをさぐるためには、「4類統合」のような東京人的観点から(すなわちデータの外部から)データを見ただけでは不十分であり、インフォーマントの意識に即したやり方で(すなわちデータの内部から)データを見る必要がある。ことばをかえていえば、データに語らせることが重要なのである。

付記：本稿は文献(1)の第12章を全面的に書き改めたものである。福嶋秩子(旧姓尾崎)、御園生保子両氏の有益な助言に感謝する。本稿で用いられた「4類統合」は、筆者と、福嶋秩子、御園生保子、藤田克彦3氏とで決めたものであり、具体的にどの語形をどのカテゴリーに入れたのかについては、文献(1)(2)に述べてある。この調査・研究は、文部省科学研究費・特定研究「社会関係・場面に応じた言語行動」(研究代表者・柴田武)によって行なわれた。

引用文献

- (1) 柴田武監修、荻野綱男・藤田克彦・尾崎秩子・御園生保子編著(1980)『都市の敬語の社会言語学的研究——昭和53年度札幌における敬語調査報告——』自家版
- (2) 尾崎秩子・御園生保子・藤田克彦・荻野綱男(1980)「話者の属性から見た敬語の使い分け——札幌における敬語調査から(1)——」国語学第120集
- (3) 荻野綱男(1980)「敬語における丁寧さの数量化——札幌における敬語調査から(2)——」国語学第120集
- (4) 荻野綱男(1980)「敬語表現の長さ丁寧さ——札幌における敬語調査から(3)——」計量国語学第13巻第6号

- (5) 荻野綱男 (1981) 「近所の人に対する敬語——札幌における敬語調査から(4)——」国語学第124集
- (6) 国立国語研究所 (1957) 『敬語と敬語意識』秀英出版
- (7) 国立国語研究所 (1954) 『昭和28年度国立国語研究所年報5』
- (8) 国立国語研究所 (1955) 『昭和29年度国立国語研究所年報6』
- (9) 野元菊雄 (1967) 「敬語をどう使い分けているか」『ことばの生活3』筑摩書房
- (10) 三石泰子 (1977) 「待遇表現としての文の地理的分布——長野県飯山市・新潟県新井市地方の場合——」国語学第109集
- (11) 柴田武編 (1979) 『都市化と敬語——昭和52年度札幌における敬語調査報告——』自家版
- (12) 柴田武 (1979) 「都市化のもたらしたもの——マンションの言語調査——」AJALT 第2号
- (13) Sibata, Takesi (1979) 「Urbanization and Linguistic Variations」Language Sciences Vol. 1, No. 2

——埼玉大学講師——

(昭和58年11月25日 受理)